

新海洋時代と加工部門

大 島 浩

年の大量漁獲の影響も県念されるが、少くとも来年は、今年多量に出現した昭和四九・五〇年級群の生残り（Ⅰ・Ⅱ年魚）に、今春高い密度で発生したと伝えられる五一年級群（Ⅰ年魚）を加えて、高い水準の来遊が期待できそうである。しかし、更に増大してかつての大豊漁期が再現されるものか、近くは四八年級群の如き低水準年級群が連続出現して増大が止まるものかは、今後の調査研究にまたなければならぬ。この動向はサンマやマサバ、イカ類などの回遊性資源の変動と深いかかわりをもつと考えられているので、相互の関連において、組織的な調査研究の強化が必要と考えられる。

（文責・内藤）

本道の漁業が、海洋法と、食糧自給論の中で大きくゆれ動いている。この論議から加工部門はどう把握するか私の考え方を述べて見たい。

水産業の中で漁業生産と加工生産は車の両輪のようだと云はれるが、加工部門は、獲つて来たものを処理する女房役であると考えた方がよいだろう。この意味で、日本の水産業が、高度生長時代に他産業にひけをとらない大発展をした。同じ一次産業の農業などより矛盾もなく、沖合より遠洋へと拡大生産を上げた。この背景には、冷凍技術の発展により漁獲物が半年、一年と全く新鮮なままで卓にのせることが出来るようになったこと、第二に、漁業資源として豊富で、低級魚とされたスケトウタラが、良質なねり製品原料として、円滑な消流品の「冷凍スリ身」の製法が発明されたことが挙げられる。

また、フイツジユミール生産が、大型・新

式のプラントの導入によって、歩留、品質、コストが飛躍的に向上し、魚価の向上に役立ったことも第三の技術革新として挙げて良いと考える。

このように、生産拡大は、これに対処する、処理加工技術があつてこそであることは、イカ漁業においても、カニ漁業においても、加工技術の発展が大きな役割を果たして来ている。

新海洋法時代は、この拡大生産に対して、とくに、本道沖合・遠洋漁業に打撃的な問題を与えると云はれている。これは単に漁獲量の問題ではなく、また食糧の自給問題でもない別な面も考慮する必要がある。すなわち今までの拡大生産は、漁業者に大きな利潤があることが前提で発展して来たもので、単に、漁獲量の記録を作るためでも、たん白質の生産のためでもないはずである。

今後、このような高い利潤を挙げるために

は、量が減るなら、魚価を高くする以外に方法がないと一応云うことが出来る。この場合に、消費者からは「安い魚を」という要求や、魚から、畜肉や、卵、プロイラーに変えてしまおうだろう。さらに、開発途上国や、魚のもてる国からの輸入が促進され、結局、漁業生産自体が成立たつなくなる恐れさえある。

現在も水産物の輸入は年々非常に割合で増加している。この中味は、エビ・魚卵類・マグロなどで、水産食品は、たん白質という意味より、趣好品、食生活を豊かにするという要素を物語っている。

一面、水産製造業（産業分類による）は、漁獲物を一次処理する加工と、水産物を原料とする食品工業に、発展するに伴い分化している傾向にある。たとえば、ねり製品が、原魚からカマボコまで一貫加工が、冷凍スリミ製造と、包装カマボコなどを作る工場え、高次加工品も、原料は、一次加工で冷凍、塩干したのからというように分かれて来ている。この傾向は、技術の発展による当然の成りゆきであるが、食品工業化した工場は、その原料を、世界に広く求めることが出来る。なにも高い原料を国内で求めることはいらない。

これらから、魚価を高くすることは、極め

て困難な問題である。

このように、私は日本の水産業が、海洋の縮小によって、自からその生産が利益が少いために左右されない、水産業政策が必要であることは論をまたない。

ホツキガイ稚貝の機械採集

増 殖 部

しかし、私共の加工部門は、この事態を正確に把握し、魚価を高めるためのいろいろな研究が直接対応出来る、もつとも有効な手段として、努力する責任を感じるものである。

ホツキガイは北海道における重要な浅海貝類資源であるが、その生産量は漸減傾向を示しており、昭和四九年度の漁獲量は二、九六二ト（北海道水産現勢）で、最盛期の二分の一程度である。この種は北海道海面漁業調整規則により殻長制限（七、五cm）、及び産卵期保護のための禁漁期間が設定されており、さらに自主規制を加えている漁協も多く、漁獲量は各漁場ごとに資源調査を基にして定めている。このような漁獲管理は、それぞれの海域で徹底して実施され、資源の維持が計られているが、積極的な増殖対策としては移殖等が行なわれているにすぎない。

ホツキガイの減耗は害敵生物による食害も見られるが、底生期に移行した稚貝が波浪等により打ち上げられることが主因と考えられ、二年貝に成長するまでに多くとも一割程度しか生残れないとされている。この時期に適切な手段を講じて、減耗を防止することがホツキガイの増殖対策として有効であり、これまでも潜提などの試験が実施されているが減耗防止には至らず、むしろ集苗施設としての有効性が確認されている。今回の試験は、この時期のホツキガイを機械的に採集して、中間育成を行うための第一段階として、機械採集が可能かどうかを検討したものである。別海